

2017/7/31 記

HUAC156 後藤裕司

寺尾（旧姓 植木）朱美さん追悼山行 二股は遠かった

寺尾朱美さんの追悼山行をしよう（したい）との話は、昨年の広大山の会の合同山行（私たちは遠見尾根から五竜岳に登山）を終えたあと鹿島クラブで持ち上がった。

場所（目的地）は劔岳の「二股」。理由は、寺尾滋朗さんの話で、朱美さんが、近づく自分の死期を前にして“一番楽しかった時期は、大学4年間の山岳部生活だった、中でも（3年生の）夏山の固定合宿（劔岳の二股にベースをおいて、八ツ峰、源治郎尾根などを登る。朱美さんはサブリーダーで1年生を引率した）で、その日の登行を済ませた後、夕食の支度を下級生がしている間、岩の上に寝転んでいたときに、最も幸せな時間だった。”と語ったことによる。

じゃあ、関係者でそこ（二股）を訪ねようではないか とは石田さんが言い出したかどうか定かではないが、私はそれを聞いて是非参加したいと意思表示した。時期は来年（=今年）の夏というので、頭の中にインプットしていた。

今年の1月、和田さんから計画せよとの指令が来たのち、夏のこの時期として、おおよそそのプランを返信したのはかなり和田さんを待たせた後のこと（5月）であった。

メンバーの招集は和田さんに委ねた（植木さん岳中のメンバーでかつ動ける人）。

入山は広島方面からは富山からの室堂入りも考えられたが、前日 KC 入りして全員で動くほうがいだろうと、黒四ダムからハシゴ谷乗越経由で真砂沢ロッジ入り、翌日二股を往復後に KC に帰着。としていた。

時期は、梅雨も明けて天気が良くなっているだろうと、7月下旬に設定。広島から私と同行するのは岸夫妻。「行く」意思を確認し、仕事の休みを取ってもらった。7月27日 KC 入り。28日入山、29日下山、30日帰広の予定。

しかし北アルプス北部は今夏に入って天候不順で、残雪が多いとの情報や、ハシゴ谷の道は人も少なく荒れているのでは、何より我々の技量で無事に歩けるかとの疑念があって、直前になって無難な室堂からの入山とした。

そうと決めて宿を予約するのが遅くなったが、私の一存で劔山荘を6名で予約。

（真砂沢ロッジはかなり混んではいるが、その時点で受け入れは可能の返事だった。迷ったが、室堂からではかなり遅くなると踏んで止めた。劔沢小屋は、既にいっぱい無理ですと断られた。）

真砂沢ロッジにハシゴ谷の道の様子を聞いたら、“切り開きが進んでなくて梯子が壊れたところも有る。ルートファインディングが必要”とのことだった。

ここに致命的なミスがあった。29日中に劔山荘から二股に行つてその日に KC に帰着するのは行程的に既に無理だったのである。

7月27日（木曜日）

府中町の私の自宅に岸夫妻が愛車 BMW で来てくれて、出発したのは6時半過ぎ。運転を交代しながら鹿島クラブ到着は夕方5時頃。予定通り。KCには東京組の和田さん、笹川さん、寺尾さん、小屋番の木村さん（広島）、北九州から馳せてきた岩尾さんとで8人が顔を揃えた。夕食は木村さんが準備してくれていた。

ビールを飲みながら順に朱美さんとの思い出などを語って行く。つい飲みすぎてしまった。岩尾さんはすでにふらついている。

7月28日（金曜日）

扇沢に車を停めるため、6名は2台で早め（5時？）の出発。朝から小雨であった。

扇沢の第一駐車場（無料）に停め、始発7時半まで駅舎で過ごす。言うまでもなくここは針木岳の雪崩遭難時の捜索隊の前進基地だった所。

トロリーバスには何回か乗ったが、私はトンネルの中をダムまで歩いたことがある。冬に赤沢岳西尾根を登ろうとしたからだだったが、トンネル出口から上を覗いて急傾斜と雪の深さを見てすぐ断念した（私にはヒョルクセがある）。

バスを降りて黒四ダム上を対岸まで歩き、地下ケーブル、ロープウェイと乗り継いで室堂ターミナルへ。これは私には初めてのコース。室堂の駅内で登山届に記入（二股往復と記した）。

意外にも掲示してある室堂の天気予想はこの日は途中までA（登山適）明日もAからB、30日は朝からC（不敵 風雨）となっていた。30日に剣岳頂上を目指そうかとの和田、笹川両氏の企みはここで潰える。

そして外に出てみると立山の稜線はガスに覆われて見えないまでも、雨は降っていない。着ていた雨衣を脱いで歩き出す。

今日の行程は剣山荘までとさして時間はかからないと踏んでいたが、雷鳥沢キャンプ場まではくねくねと長い。皆の足取りは快調とはいえない。私もだが、慈郎さんも昨夜の酒が抜けきれていないと辛そうである。熔結凝灰岩の角材をセメントで固めた歩道は登山靴では歩きにくい。何より雷鳥沢までの下りは帰りの上りの辛さを予想させて気が重い。

雷鳥沢キャンプ場を後に、橋を渡って雷鳥坂に取っ付く。初めは雪面である。この頃陽が差して雪の反射で暑く顔から汗が滴る。

先頭の私と二番目の岸さんの間が開いたので、尾根上になってからは、岸さん先頭、奥様（月美さん）の順とするが、どうにも岸さんの足が普通に進まない。眠気がきていて、なんとか頑張って目を開けている。上り2時間とコースタイムではあるが、後から来る人たちに次々と抜かれ、やむなく休憩を多発。短時間仮眠をとろうとするが、スッキリするほどの時間が取れる訳もなく、ゆっくりでも兎に角上ってもらおう。その間奥さんは優しく励ます（月美さんは普段スイミングに通っているからか、旦那さんより強い）。

漸く剣御前小屋がある乗越に着き小休憩。ここから剣山荘には、雪の多く残っている尾根沿いのトラバース（アイゼン必要の表示あり）より、剣沢小屋経由が安全とのアドバイ

スを小屋の人に聞いて、当然この道を探る。

下り始めは別山側の裾を巻くようにトラバースする。分かりにくくもないが先頭を私に替わる。

久し振りに見る剣沢上部は、こんなだったっけ？と思うほどに岩や緑地の露出が多いような気がした。私たちが過ごした時からは半世紀近く経っているのだから、温暖化で当然と言えば当然なのだが、これでも今年は残雪が多いのだそうだ。



剣岳の頂上付近はガスで隠れているが、八ツ峰下部、源治郎尾根は見える。期待通りの姿だが、あの頃平気で昇り降りしたのが嘘のように険しく感じる。

そして肝心の二股方向への剣沢雪渓は予想より急傾斜に落ち込んでいて、あれを登る体力が果たして帰る時に残っているかと、ここまでの消耗を考えて絶望的になったのである。

回想するのは、私が2年生の時の夏、和田さん、岸さん、私とで源治郎尾根Ⅱ峰を登攀中、弘前大学（後で知った）の女子がⅠ峰の懸垂場で墜落するのを目撃し、平蔵雪渓で出会ったパトロールにその旨報告した際、「またか、さっきチンネでも広大生が落ちて・・・」と告げられ、慌てて二股に駆け戻ったこと。やがて三の窓雪渓を降ろされてきた金丸を背負子に乗せて、真砂までの狭い道を交代で担いだこと。雪渓からはスノーボードに積み替えてロープで引き上げたこと。途中から急を聴いて駆けつけてくださった福井の増永さんに初めて会ったこと。あの頃の体力があれば二股往復など軽いものだが・・・。

下りでは岸さんも大して遅れることなく歩いている。剣沢キャンプ場（三田平）－警察派出所－剣沢小屋前へと下ってからは、岩道と雪面をほぼ水平に歩いて剣山荘へたどり着く。この頃には小雨も降り出していた。

受付でチェックイン。朝食は何時でも出発できるよう弁当にする。一人1万円なり。二階「八ツ峰」の部屋、向かい合わせの2段床の一方上段を6名で占める。一人1畳分あって、安心する。しばらく休憩後、夕食をこの日第一回目のグループに混じってとる。

さて明日の行動を如何にするか。岸夫妻は今日の消耗を考えて、明日は来た道を帰ることで決まり。残り4名は、天気が良ければ剣沢を途中まで下って引き返す？真砂からハシ

ゴ谷乗越ー黒四ダム？・・・ムリムリそれに往復券買っている。それじゃ前劔から本峰を拝んで帰りましょうか・・・と言って眠りに入る。が、すぐに「暑い、暑い」と和田さんが言い出す。上段だからか、部屋が満員だからか、フトンが（湿気を熱に変える）ブレスサーモだからか、たしかに暑い。

7月29日（土曜日）

何度も暗闇の中腕時計で時間を確かめる。同部屋の中には、今日劔を目指す人、昨日劔に登った人がいて、起き出す時間はまちまち。私たちは二股行きを諦めたので、明るくなってからの出発予定（とりあえず前劔）。だったが、岸さんの「外は雨ですよ」の声に、「ええ～」の滋郎さん。「なにそれ、嬉しそうな」と和田さん。早くから稜線に出て歩くのは止めようねと決まった瞬間だった。小屋の外では雨支度をして、リヒトで出かける人の姿も続々と。劔沢小屋側から劔山荘方向に歩いてくる人を曇った窓越しに見ながら、前劔に行っても本峰が望めないだろうし、我々の足取りで先を急ぐ人の邪魔になってはと理屈をつけて、前劔にも行かないことに決めた。

とりあえず弁当の朝食を食堂でとったが、その前にひと騒動。和田さんがストックとピッケルをどこに置いたか、無い無いと探している。小屋の人に聞いても落し物は無いとのこと。結局、ザックの中に収まっているのが上から触って確認できたのはしばらく経ってから。安心して和田さんだけ皆に遅れて弁当を摂る。



さあ、来た道を帰ろうかと外に出たら、雨が止んでいた。だからといって前劔に向かうことはもうしない。雨は止んだが這松で濡れるからと雨具は着たままで出発。

先頭を私で歩き始めたが、なんと、いつの間にか御前小屋へのトラバース道への路を歩いていることに途中で気付く。このまま行ってもいいかなと思ったが、皆は劔沢小屋の道に引き返す（そのほうが安全）というので、雪面を斜めに下って劔沢小屋方面への道に合流することになる。ここで笹川さんは、スキー靴用のワンタッチアイゼン（公園を3歩歩

いて確かめた)を付ける。月美さん、滋郎さんも土踏まずに簡易アイゼン着用。無事に本来の昨日通った道に帰る。ここで雪渓上を直線状に上がれば早いのではないかとも思うが、“(植生保護のため)指定された道から外れてはいけません”の標示に従う。高山植物(イワカガミやハクサンイチゲ他イロイロ)が可憐で目を楽しませてくれる。振り向くと劔岳本峰も時折姿を見せている。

三田平キャンプ場を過ぎて、突然私が前方左手の尾根の先にある別山へ行こうと切り出す。岸夫妻はこのまま御前小屋への道を辿るとして、一回は前劔にでも行こうか考えていた4名は、まだピークに立っていない。「1.5時間位余分にかかるけど・・・」との私の提案に反対は出なかった。岸夫妻と別れて4名は別山への上りに入る。

途中からガスが晴れて劔岳がよく見えるかもの期待とは裏腹に、頂上に近づくにつれてガスが濃くなってきたが、頂上(南峰)には石で囲われた祠があった。その前で居合わせた方に記念撮影をしてもらおう。

乗越(御前小屋)への下りは予想以上に時間がかかったように感じたが、ほどなく無事到着。小休憩後、昨日苦しんだ雷鳥坂を下り出す。すれ違う上りの方が、「あと何れ位ですか?」と聞くのに「此処まで来ればチョットですよ。」と返す。

昨日はこの辺で休憩したなど見覚えのある箇所をいくつか通過しながら順調に降りる。雷鳥沢に入り、先頭の私が木橋を渡った時、後ろから呼び止められる。ここで朱美さんの追悼行事をするらしい。小雨が降り出していた。

小さく石を積んで、上に朱美さんの写真を置いて写真を撮り、お線香を上げ、(朱美さんが)美味しさに喜んだという果肉の紅いグレープフルーツを分けていただく。私は安曇野インターの開運堂で求めたくるみ羊羹を出して皆で食べた。滋郎さんが散骨用にと出したケースに入った朱美さんの遺骨は、まだ機会が有るからと和田さんの言葉で持ち帰る事になる。私も同感であった。



雷鳥沢から室堂ターミナルへは、予想通り難儀な昇り降りが続いた。私は最後尾になり滋郎さんのあとから付いて歩いた。途中硫黄臭の強い付近で左手柵の向うに雷鳥の成鳥が三羽位姿を現して、滋郎さんがカメラに収めた。ここまで見られなかったのも、やや安心した。室堂ターミナルからトロリーバス、ロープウェイ、ケーブルカーと乗り継ぐ。

岸さんには黒四ダムに降りたところで電話してみた。「今、トロリーバスの中です」とのこと。扇沢で待っていて下さいと伝え、我々もあとを追う。

扇沢で岸夫妻と合流したのち、皆で温泉（黒部観光ホテル）に入り、そば処いろりで遅い昼食とする。それぞれみんな美味しかった。

KCでは木村さんが夕食の材料を買い揃えてくれていた。岩尾さんは昨日中に北陸経由で帰途についたとのこと。

「冷しゃぶのお肉はゆがいたあと氷水に浸けるのよ」とか月美さんのアドバイスもあって料理はどれも美味しく見栄えも良い。木村さんに感謝×2。私は何も手伝わなくてごめんなさい。

7月30日（日曜日）

木村さん、笹川さん（玉子焼）の手による美味しい朝食を頂いてKCを発つ。

広島への帰途には寺尾さんも入れて4名で、運転を交代しながら順調に帰り着いた。

この後寺尾さんは息子さんと合流して球場でカープの試合を観戦する。この夜カープは対ヤクルトに14-1で大勝した。

私は文化交流会館で高校生たち30名を引率してきた韓国大邱広域市の山岳連盟の先生方に再会できた。松島宏さんが中心となって受け入れ、奥三段峡の遡行やキャンプを広島県山岳連盟が全面的にバックアップしたあとの交歓会であった。

おわりに

二股への再挑戦は、秋にハシゴ谷乗越からにしたら（道も安定しているはず）・・・との案が出たが、秋はそれぞれいろいろ忙しい事情もあって何時かは具体的にならなかった。

それとは別に、行きたいけど行かなかった雲の平はどうなんだろうとの声も。いずれにせよまだこれで終わっていないねとの共感が残った今回の山行（今回は偵察？）だった。

リーダーに指名された私としては、二股には遠くたどり着けなかったけど、皆で朱美さんを憶い、気持ちを通じ、無事帰り着いたこと。自分たちの力（衰え）が認識できたこと。懐かしい劔岳の姿に再会できたことで少し満足している。

強くて優しく美しく輝いていた当時の植木朱美さんへの憶いはいつまでも消えて無くならない。皆さんも同じですよ。

2017年7月 寺尾（旧姓植木）朱美さん追悼山行

参加者： 笹川雅史 和田穰二 岸美喜男 岸月美 後藤裕司 寺尾滋郎